

CITATION: Esposito M, Worthington HV. Interventions for replacing missing teeth: dental implants in zygomatic bone for the rehabilitation of the severely deficient edentulous maxilla *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2013, Issue 9. Art. No.: CD004151.pub3. DOI: 10.1002/14651858.CD004151.pub3.
CRG名: Oral Health.

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 17 June 2013
Clib issue No.; N/U: 2013 Issue 9; Update

アブストラクト

背景: 歯科用インプラントは喪失歯の機能回復に用いられる。歯科用インプラントの埋入は、インプラント体が固定されるだけの十分な骨量が存在するかによって制限を受ける。この問題を解決するため、いくつかの骨造成術が開発されてきた。頬骨インプラントは長いスクリュー型のインプラントで、高度に萎縮した上顎に対する骨造成術の部分的な、もしくは完全な代替療法として開発された。その内容は、1本から3本の頬骨インプラントを臼歯部歯槽頂部から上顎洞を貫通、あるいはその外側を通過させて埋入し、頬骨骨体と一体化させるものである。補綴装置を安定させるために、数本の従来法の歯科用インプラントを上顎の前方部に埋入することも必要とされる。頬骨インプラントの潜在的な主な利点は、骨移植が不必要となる可能性があることと、固定性の義歯をより早期に装着できる可能性があることであろう。頬骨インプラントのもう1つの特異的な適応としては、上顎骨切除後の癌患者における上顎骨再建となりうるものがあげられる。

目的: 高度に吸収した上顎に対するインプラント支持型補綴装置による機能回復において、造成された骨に埋入された従来法の歯科用インプラントと比較して、骨造成術を併用した頬骨インプラントと併用しない頬骨インプラントの効果を検証すること。

検索戦略: 本レビューでは、Cochrane Oral Health Group's Trials Register (2013年6月17日まで)、Cochrane Central Register of Controlled Trials (CENTRAL) (The Cochrane Library 2013年第5版)、OVID経由でのMEDLINE (1946年から2013年6月17日まで)、OVID経由のEMBASE (1980年から2013年6月17日まで)を検索した。いくつかの歯科雑誌のハンドサーチを行った。言語の制限は設定しなかった。未発表の試験が存在しないか確認するため、個人的な関係者と、すべての頬骨インプラント製造業者とコンタクトを取った。電子的な検索においては、出版言語や日時になんら制限は設けなかった。

選択基準: 少なくとも1年の機能期間を追跡調査したものであり、従来法のインプラントでは機能回復ができないほど高度に吸収した上顎に対し、頬骨インプラントを骨移植のあるなしに関わらず行った参加者と、骨移植を併用して従来法のインプラントを行った参加者を含むランダム化比較試験(RCTs)。

データ収集と分析: 適切な研究の選抜とバイアスのリスクの評価は2人のレビューアが別々に、2回ずつ行った。抽出された研究の数が4個以上の場合はランダム効果モデルで、4個未満の場合は固定効果モデルを用いてメタアナリシスを行い結果を統合した。介入効果の大きさは、連続変数アウトカムの平均差と、二値変数アウトカムのリスク比、および95%信頼区間で示した。異質性は臨床、方法論の両面から検討した。

主な結果: 本レビューの条件に合致したRCTは1つとして、確認できなかった。

レビューアの結論: 萎縮した上顎の治療にあたって、頬骨インプラントが代替的な骨造成術よりもなんらかの利点を有するかどうかを評価するには、この領域におけるRCTが必要である。

平易な要約(Plain language summary)

レビューにおける論点

Cochrane Oral Health Groupの著者らによるこのレビューは、骨移植のような失われた骨を造成する手法の代替法として、上顎洞を貫通し頬骨に達する長径の長い口腔インプラントを用いることの良い影響と悪い影響を評価するために行われました。このレビューは本治療法に関する以下の3つの手法を評価することを目的としています。

- (1) 顎骨の欠損を造成する手法に対する完全な代替法。
- (2) 前方の顎骨に対しては骨造成が必要とされるような部分的な代替法。
- (3) 上顎骨の切除法のような硬口蓋を除去するような外科手術後に必要となる人工口蓋(補綴装置や緊塞装置)の維持するためにはどれくらいの長さの口腔インプラントが有用なのか。

背景

上顎においてインプラントを安定させるために十分な骨が存在しないことが時々あります。骨は時には人体の別部位から採取したり、代用骨が用いられたりします。代替的な方法として、1から3本の長いスクリー型インプラントを上顎洞から頬骨に埋入する頬骨インプラントがあります。この方法を用いれば、骨移植が必要でなくなるかもしれません。このインプラント治療により、人工歯を固定することができます。

研究方法

文献検索は2013年6月17日に実施されました。その結果、頬骨インプラントと従来の骨移植の結果を比較した試験は見つけられませんでした。

主な結果

上顎洞を貫通し頬骨に達する長径の長いインプラントが骨造成法の代替手段と有効かどうかを直接的に評価した研究はありませんでした。

エビデンスの質

該当するものではありません。

(翻訳 園山 亘; JCOHR)

翻訳公開日: 2014年 6月 3日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年12回改定版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。